



Kouritsu-Chu Madoushi

効率厨魔導師、 第二の人生で 魔導を極める

謙虚な
サークル 著

kenkyonasakuru

主な 登場人物

Main Characters

レディア=ランディア

鍛冶師の娘。
自分の背丈ほどの
長い斧を操る。
高い戦闘能力を持つが、
性格はのんきで家庭的。

クロード=レオンハルト

落ちぶれた騎士家の子。
経済的な事情で、幼い頃から
家を出て冒険者をしている。
見た目はイケメン。

ミリィ=レイアード

少年ゼフの噂を聞きつけ、
ゼフの通う学校に転校してきた
魔導師の少女。魔導の天才だが
無鉄砲で考えなしなところがある。

ゼフ=アインシュタイン

中身が老人のまま
少年に戻ったゼフ。今度こそ
効率的に魔導を極めることを
決意し、日々修業に励む。

ゼフ=アインシュタイン(老人)

長年、緋系統魔導の修業に励むも、
その才能がなかったことが発覚。
無念を晴らすため、
時間を遡る魔導を編み出す。

多くの魔導師たちが集まる中、ワシは万雷の拍手を浴びていた。
頭を垂れるワシの前には、魔導師協会のお偉いさんである。

「魔導師ゼフⅡアインシュタインよ、汝の素晴らしき魔導師の力に敬意と賞賛を表し、ここに緋系統魔導師最高位の称号、フレイムオブフレイムを授ける」

「はっ、有り難く頂戴します」

「この名に負けぬよう今後も精進せよ」

……精進と言っても、ワシはもう結構なジジイなのだな。

緋系統魔導師、最高位の称号「フレイムオブフレイム」。

若き頃から緋の魔導師の修業に励み、老年になった今、ついにこの称号を得ることができた。
酒、女、金、あらゆる誘惑に目もくれず人生の全てを緋の魔導師に捧げてきたのだ。

まさに感無量である。

未だ鳴り止まぬ拍手を浴び、手を振りながらゆっくり講壇を降りていく。

花道を往くワシ。その姿を目に焼きつけているであろう、若い魔導師たちの羨望の眼差しが心地よい。

この後は記者の前で会見、協会でお偉いさん方と交流、スケジュールはみっちり詰まっている。くつつつ、人気者は辛いな。

ワシは目立つのは嫌いではない。

人は賞賛され、持て囃されて自信を得ることで成長できる。

逆に貶められ、馬鹿にされて、それに憤慨することでもまた成長できる。

どちらにせよ『目立つ』のは、非常に効率的な成長方法なのだ。

というワケで、存分に目立たせて頂くのではないか、ワシの更なる成長のために！

花道を渡り終えたワシは振り返り、魔導師協会の皆の前で腕を振り上げ、叫ぶ。

「ワシは更なる高みを目指す！ フレイムオブフレイム、その中でも歴代最強の座を手に入れてみせよう！」

ワアアアアアアアアア！！

拍手と歓声の渦に包まれながら、ワシはマントを翻し、会場をあとにするのであった。

去り際に放ったワシの言葉は魔導師協会配布の新聞にも掲載され、世界中に広がることとなる。

翌年、一人の魔導師がスカウトスコープなる新しい魔導を開発して魔導師協会を訪れた。

これは魔導師の才能を測る魔導で、念じることにより自分の得意な魔導の系統を知ることができるというものだ。

魔導は基本的に五つの系統に分かれている。

「緋」

炎に干渉する魔導で、優秀な念唱速度、攻撃範囲、威力を持ち、五系統で最も攻撃性能に優れている。ワシの得意魔導でもある。

「蒼」

水に干渉する魔導で、攻撃力は低めだが特殊効果のあるものや、補助、回復など様々な効果を持つ魔導が存在する。

「翠」

大地に干渉する魔導で、極めれば地形や空間を変動させることも可能だ。

射程距離が短いなど色々と制限が多いが、一撃の威力なら最も強力である。

「空」

大気に干渉する魔導で、風や雷を自在に操ることができる。

攻撃範囲と射出速度が非常に優秀だが、気まぐれな天候の影響を強く受けるため、あまり融通が利かない。

「魄」

異界に干渉する魔導で、異界に存在するという天使や悪魔、極めれば更に上位の存在の力を借りることができる。ま、ワシは専門ではないのでそこまで詳しくはないがな。

魔導にはこの五系統があり、その成長には非常に時間がかかるため、魔導師はいずれか一つに絞って修業を続けるのが現在の主流である。

ワシはの中で緋ひを選び、一生をかけて修業に励み、そして最高の称号「フレイムオブフレイム」を勝ち取ったのだ。

——しかし、スカウトスコープによる魔導の才能測定か。

当然ワシも興味はある。というか、興味のない魔導師などおらんだろう。

先輩方は何故か遠慮していたが、ワシはスカウトスコープを習得し、自身の才能を測定した。どれ、フレイムオブフレイム様の「緋」の才は……

ゼフ＝アインシュタイン
レベル 99

魔導レベル

緋：62／62

蒼：49／87

翠：22／99

空：22／89

魄：19／97

思わず目が点になる。

ワシの最も得意とする「緋」の魔導、その才能限界が一番低いと……いうのか……？
才能限界とは、文字通りその魔導をどこまで極めることが可能かを表すものである。

一生をかけて鍛練した魔導が、よもや一番自身に合っていなかったとは……

「ばかなっ!？」

思わず叫び声を上げ、もう一度、いや何度もスカウトスコープを試みるが、才能限界の数値は変わらない。

思い返せばかなり前に、緋の魔導の成長に限界を感じたことがある。

しかし使いにくいので殆ど修業しなかった「翠」や「魄」の方が才能限界が高いだど……？
他のも大して修業していないが、軒並み「緋」より才能限界が高い。
完全に選択ミスである。

この程度の才能では、到底緋の魔導を極めたなどとはいえない。

ワシはもうジジイ、先は長くはない。

このまま……死ぬなど……こんな結末、認められるはずがないではないか！

「なるほどな……先輩方がスカウトスコープを使わなかった理由はこれか……」

年老いた身体、もはや成長の見込めない状態で、今まで生涯をかけて修業してきた成果を完全に否定されるなど、死ぬ前に死ぬほどの悔いが残るに決まっている。

知ってしまったからには、死んでも死に切れない。

それから暫くして、ワシより緋の才能限界が高いどころの馬の骨がワシからフレイムオブフレイムの称号を奪っていった。才能限界に届いていないにもかかわらず、魔導レベルはワシよりはるかに上だった。

魔導師協会が言うには、ワシの魔導レベルが低すぎて、フレイムオブフレイムにふさわしくないとのことである。

その言葉にワシは反論できなかった。

もはや伸びしろのないワシと、これからさらに伸びる若者。

どちらにその称号を与えるか、考えるまでもあるまい。

しかし才能が高いとはいえ、大した実戦経験もない若造にこの称号を奪われるというのか……

屈辱である……が、魔導師の能力を数値化できるスカウトスコープが生まれた今、その考えはわからんでもない。

魔導師協会の本部がある塔を追い出されたワシは、それを仰ぎ見ながら叫ぶ。

「だがワシは諦めない、ワシは死ぬまで魔導を追究し続けるぞっ！」

空が裂けるほどの大声。

くすくすと嘲笑する声が聞こえてくるようだ。

だが、それでいい。ぐつぐつ煮えたぎるような想いを胸に、ワシは塔を去ったのであった。

それから十年後、ワシは足掻き、苦しみ、そして修業につぐ修業の末、死を目前にして新しい魔導に辿り着いた。

自分が無駄にした時間、それをやり直したいという強い想いによって編み出した、時間を遡る魔導、タイムリープ。

言うなれば、過去の自分に現在のワシの精神を上書きする魔導である。

これで五系統どころか魔導自体を覚える前の身体に戻るのだ。一から修業し直す必要があるが、

それでも構わない。

ワシ、修業好きだし。

「この知識とスカウトスコープ、そして有り余る時間をフルに活用して、今度こそ効率的に魔導を極めてみせる」

決意を胸にタイムリープを念じる。

意識はどんどん遠くなり、昏くくらなっていくた――



どれほどの時間、暗闇を漂っていたのだろうか。

ワシはどこから聞こえてくる声に起こされた。

「ゼフ、早く起きちゃいなさい！」

見覚えのある天井。

視線を横に向けると、白いシートが目に入る。

聞こえてくるのは懐かしい母親の声。

微かに香るスーかすプの匂い。

「あ、あーあー……」

そして少し高い声、小さなつるつるの手足。

――ワシの身体は少年に戻っていたのである。

「ぐっくっ、どうやら成功したようだな……流石はワシといったところか」

ベッドから飛び起きて少し身体を動かす。その動作一つ一つが軽快だ。

ジジイの身体から少年の身体に戻ったワケであるから当然だが……ちょっとした感動だな。

「お次は……っと」

窓を開けて人差し指を外に向け、緋系統の初等魔導であるレッドボールを念じる。

しかし、発動しない。

「む……やはりまだ魔導は使えぬか」

体内に意識を集中するが、やはりどうも体内に流れる魔力線が上手く働いていないようだ。

魔力線というのは魔導師の体内に張り巡めぐらされた、魔力が通る文字通りの線である。魔導師の才能がある者ほどこれが太く、身体中隅々まで行き渡っているのだ。

魔導を極めるために戻ってきたというのに、今のままでは魔導が使えない。早急に何とかしなければならぬだろう。

「ゼフーっ！ 学校遅刻するわよーっ！」

下から聞こえる母さんの声。

返事代わりに腹の虫が鳴く。

……ま、腹が減っては戦はできぬというしな。

とりあえず、朝飯を食べてから色々考えるとするか。

「ああ今いくよ、母さん」

階段を駆け下り、久しぶりに母さんの顔を見る。少し涙が出てしまった。

母さんは不思議そうな表情を浮かべ、ワシを見て優しく笑う。

その懐かしい笑顔に、涙が零れたのだった。

「どうしたの？ ゼフ」

「いや……ワシ、嬉しくて……」

「変な子ねえ……」

首を傾げる母さんだが、中身が変わったワシに違和感を覚えることはない。

タイムリープにより生じる空間の波が、小さな違和感を打ち消してしまうのだ。

ワシが老人口調であっても、そのことを不審に思われることはないというわけである。

涙を拭い、ワシは母さんを強く抱きしめる。

「あらあら、怖い夢でも見たの？ ……早く食べないと冷めてしまうわよ？」

「……うむ」

返事をしてワシは食卓につく。

ワシはジジイまで生き、そこで初めて、自身の人生が無駄であったことを知った。

時間の大切さを痛感したのだ。

魔導の道は険しい。一分一秒でも無駄にはできない。効率よく魔導の修業を行わねばならない。

だが、今くらいはいいだろう。

涙を拭き、腹いっぱい懐かしい味を詰めこむと、拭いたはずの涙がまた零れるのであった。



「それじゃ、気をつけて行つてらっしゃい」

懐かしくて温かい食事を終え、ワシは母さんに見送られ家を出た。

最後に学校に行ったのは、魔導師の卵たちに教鞭きょうべんを振るうためであったかな。

ちなみにワシの授業はスパルタで、生徒たちからはそれなりに恐れられていた。

家を出ると、これまた懐かしい景色が眼前に広がる。

ここ、ナナミの街は田舎いなかであるが良い所だ。大人になってこの街を出た後も、思い入れが強いた

めに時々帰ってきたものである。

いかなな、また涙が出そうだ。

とりあえず行くとするか。

——魔力線を解放しに、な。

ワシはニヤリと笑い、学校とは逆方向、街の外れにある小高い山へと歩を進めた。

魔力線の解放はかなりの集中力と時間が必要なのだ。よって、人気のない所に行く必要がある。今ワシの魔力線は休眠状態。これを解放しなければ魔導を使うことはできない。

魔導師を志す者は、他の魔導師に手伝ってもらったり、自身で瞑想めいそうをしながら体内を巡る魔力線を感じとったりして解放していくのだが、ワシは既に一度通った道である。二度目であれば、自分一人で問題なく解放できるだろう。

一応、誰にも見られないように大木の上に登る。

太い枝の上で座禅ざぜんを組み、目を閉じてゆっくり精神を集中させる。

自分の身体が透けていくような感覚。そこから体内を巡る魔力線を一本ずつ感じ取っていく。額から汗が伝うが、気にせず作業に専念した。

一本一本魔力線を解放していき、全てが終わるころには身体中汗だけであった。

「おっとと……」

大きく息を吐いて力を抜くと、木の上からずり落ちそうになる。

そういえば、木の上にいたのを忘れていたな。

木から飛び降りて目を閉じ、体内に意識を集中させると、体内の魔力線に魔力が通い始めたのははつきりとわかった。

これで魔導が使えるようになったワケだ。

手を目の前にかざし、レッドボールを念じてみる。

すると小さな炎の魔力球が生まれ、目の前でふわふわと漂った。

そのまま魔力の供給を止め、レッドボールを消滅させる。

「ふむ……消費魔力は全体の一割といったところかな」

魔力線を解放したばかりのなりたての魔導師がレッドボールを連続して発現させられるのは三回程度。

そう考えると、なりたてな上に子供のワシがここまで使えるのは大したものなのだ。

流石さすがはワシといったところかな。

「とはいえ、まだ使い物にはならんか」

この身体では一切修業をしていないのだから、こればかりは仕方があるまい。

ちなみに、ワシはタイムリープを使う前に魔導のスクロールを読み漁り、当時公開されていたほぼ全ての魔導を頭に叩き込んだのである。

スクロールは固有魔導の術者が白紙のスクロールに使い方を記したいわば指南書で、誰でも使えるようにレベルを落としたものだ。

今は覚えた魔導を使いこなせる程の魔力はないが、レベルが上がればなんとかなるだろう。

気づくと、もう日が傾き始めていた。

腹が減ったと思ったら、もうこんな時間か。

とりあえず母さんから貰った弁当を食べることにする。

弁当は見た目少し物足りない気がしたが、子供のワシには十分だったようで腹も膨れた。食べ終わるとある程度魔力が回復してきたので、スカウトスコープを念じる。

ゼフ＝アインシュタイン

レベル 1

魔導レベル

緋：1

蒼：1

翠：0

空：0

魄：0

緋と蒼がレベル1なのは、今しがたレッドボールとスカウトスコープを使ったからか。

魔導の才能限界値が見えないようだが、これは恐らくスカウトスコープのレベルが低いからだろう。

魔導は使えば使うほど、その性能が向上していく。

スカウトスコープで才能限界値を見るには、何度も使ってレベルを上げなければならないはずだ。ともあれ何とか魔力線を解放し、魔導を使えるに至った。

これでワシも魔導師の端くれ。今後の課題はレベルの向上だな。

山を下りようとする、学校の方から子供たちがバラバラと帰っていくのが見えた。

おっと課題はもう一つあったか……

すなわち、学校をどうするか、である。

今日はとりあえずサボったが、どちらにしても今更あんな子供ばかりの所、行く気が起これぬからな……

辞めてしまっても構わんが、母さんがうるさいだろう。さてどうしたものか。

思考を巡らせながら山を下り、街へ帰ろうとすると、人影がこちらに駆けてくるのが見えた。

長い黒髪を振り乱し、息を切らして近づいてくる。

眼鏡をかけ、セーターを着た女性だ。一歩踏み出すごとに、大きな胸が上下する。

中々の美人だ、と思つて見惚れていると、その美人は泣きそうな声で叫んだ。

「ゼフ君！」

言うや否や、ワシに思いきり抱きついてきた。

ワシは何か言葉を発しようとするが、その胸に顔を塞がれて声を出せない。

ももごと顔を動かそうとするものの、今のワシでは大人の力に抵抗できず身動きできなかった。観念して、大人しくされるがままに胸の感触を楽しんでいると、女性の身体がふるふると震えているのを感じた。

「……心配……したんだからね……」

ぎゅうぐつとワシの顔に胸を押しつけ、よかった、よかったと泣いている。
ああ、思い出した。

この人はワシの初等学校での担任、名前はクレア先生だったか。

男女問わず生徒に人気があつて、よく男子に告白されていた。

そんな美人の先生に抱きしめられ、胸を顔に押しつけられている。

そう言えばここ数十年、こんなことはなかったな。

少しだけ頬が緩んでしまった。

学校か……すでに履習済みのワシにとっては時間の無駄だしあまり気は乗らないが、母さんやクレア先生を悲しませるのも気が引ける。

戻ってきたこの時代に慣れる必要があるし、暫くは通つても構わないだろう。

修業自体は、学校に通いながらも可能だしな。

頭の中で計画を立てながら、相変わらず顔に当たる胸の感触を楽しんでいたのであった。



結局、ワシは翌日から大人しく学校に通った。

とはいえ、真面目に授業を受けているかといえばそうではなく……授業中はずっと寝ていた。

授業が終わると同時に教室を出て、トイレに駆け込む。

別に、もおしたからではない。魔導の修業をするためだ。

トイレの中に入ると、ボロい木の衝立でドアが開かないようにし、壁にもたれかかる。

掌に魔力を集中し念じるのは——翠系統初等魔導、グリーンボール。

ぼう、と手の中に緑色の魔力球が生まれる。

翠系統の魔導は、威力は高いものの効果範囲が非常に狭く、対象に触れるほどの距離でないと効果が及ばない。

高レベルの魔物には、よほど体術レベルが高くないと当てるのが難しい、使いにくい魔導だ。

ふわふわと浮いていた魔力球は、その後魔力を供給しなかったため、数秒で消えてしまった。

一息吐いて、もう一度手に魔力を集中させ念じるのは——空系統初等魔導、ブラックボール。

ひゅるる、と風切音と共に生まれたのは黒色の魔力球。ふらふらと不安定に揺らめいている。

空系統の魔導は射出速度は速いが、威力も低いしコントロールも難しい。これまた使いにくい魔導である。

ワシはこの二つの魔導を交互に発動させ、授業が始まる予鈴^{よれい}がなる頃には魔力が切れかけていた。翠^{すい}と空^{くう}、この二つの魔導は前世^{ほとん}で殆ど使うことはなかったが、スカウトスコープで見た才能限界値の高さを考えると、いずれメインで使用することになるだろう。

使い勝手のよい緋^ひと蒼^{そう}と比べると、翠と空の二つはかなり癖^{くせ}がある魔導だ。

実戦で使いにくい魔導故に、今のうちに少しでもレベルを上げておく必要があるだろう。

ワシは授業が始まるギリギリのタイミングで教室へ戻り、即座に机に突っ伏して眠り始める。今のうちに、魔力を回復させておかねばならないからな。

クレア先生の声を子守唄代わりに、静かに意識を沈めていった。

「おいゼフ」

授業が終わってまたトイレに行こうとすると、太った丸刈りの少年がワシに話しかけてきた。にやにやとしながら、ワシを見下ろしてくる。

丸刈りの少年を無視して行こうとすると、他の少年たちがワシの前に立ち塞^{ふさ}がってきた。何なのだ一体。

「おいゼフ、いつもトイレ行って何してんだよ」

「あれか？ お前ひよつとして……んこしてんの？」

「はあ？」

訳のわからぬ問いに呆れ顔を返すと、少年たちはゲヒャゲヒャと笑った。

それに釣られたのか、教室の生徒たちも皆くすくす笑っている。

「あ……」

もしかしてワシ、からかわれているのか？

そういえば子供というのは、こんな感じだったかな。

ぼりぼりと頭をかいてみると、少年たちがワシの周りを囲み、下品な単語を連呼している。

やれやれ、少しお灸^{きゅう}を据^すえてやる必要があるか。

「まったく、下品が過ぎるな」

「あん？ なんだっ——」

リーダー格の丸刈りの少年が言い終わらぬうちに、ワシはレッドボールを念じて発動させる。

少年の横を過ぎ去った火の玉は、壁に行き着く前に燃え尽きてしまった。

うーむ、まだ全然距離も飛ばないな。

しかし、少年をビビらせるのには十分すぎる威力だったようで、丸刈りの少年はへなへなと床に崩れ落ちていった。

どうも漏らしてしまったらしく、教室の中にレッドボールで焦げた空気と少年の小便の臭いが立ちこめる。

ワシはへたり込む丸刈りの少年を、ほんの少しだけ殺気を込めて見下ろした。

「あまりこういったことは感心しないぞ？」

「ひっ……!?」

ワシの威圧に少年は気を失ってしまったようだ。

ワシを囲む少年たちに向け一歩踏み出すと、少年たちは悲鳴と共に道を開けてくれた。

ワシはそのまま、すたすたとトイレに歩いていく。

昔からこの手の輩に絡まれることには慣れているが……流石に子供相手にやりすぎだったかもしれないなあ。

「さて、修業修業つと」

トイレの扉を開けて中に入ると、即座に予鈴が鳴り始めた。

くそ、修業一回分の時間を無駄にしたではないか。



放課後。

皆が下校する中、ワシは家とは反対の方角に向かっていった。

目的地は街の外、理由は魔物を狩るためだ。

歩きながら掌の上にグリーンボールを浮かべると、魔力の消失と同時に翠系統の魔力が増した

ような感じがした。

どうやらまたレベルが上がったな。

魔導というものはこうした「空撃ち」でも鍛えることができるが、実戦で使った方がその上昇率は断然高い。

もっとも、空撃ちで魔導レベルが上がるとわかったのはスカウトスコープができた後で、それまではフェイントやトラップなど、実戦を模して鍛えていた。

ナナミの街は壁に囲まれていて、数カ所ある門には門番が立っている。

しかし、ワシはこの街を知り尽くしているので問題ない。

壁が壊れてできた隙間から難なく抜け出し、広い荒野を歩いていく。

その際、事前に用意しておいた木の棒を持って行くのを忘れない。

街の外を少し歩くと、目の前に青いぶよぶよしたゼリー状の魔物があらわれた。

地面からせりあがってきたこいつは、蒼系統に属する魔物、アクアゼル。

このような魔物があらわれるのは、大地から時折湧き出すマナが原因である。

マナは魔力の素のようなものだが、その湧き出したマナが何らかの物質を透過し、その物質の影響を受けて具現化したもの——それが魔物なのだ。

魔物は透過した物質の形を模して具現化することが多く、このアクアゼルは雨水を模した魔物とされている。

魔物の多くは、人々のことを大地を破壊するものと認識して襲ってくる。そのため、街の外へ出る者には、ある程度の戦闘能力が必須だ。

街には守護結界がかけられているので魔物は発生しないし、入ってくることもできないが、人間が一步外へ出るとその気配を感じ取り襲いかかってくるのだ。

ワシは木の棒を構え、打撃と同時にグリーンボールを念じてアクアゼルにぶつける。

衝撃と共に、ぼよん、とアクアゼルは地面を跳ね転げ、ワシの方に触手を伸ばしてくる……が。

「ハッ、遅すぎる」

ワシは触手を木の棒で捌き、同時にまたグリーンボールを念じる。

グリーンボールは攻撃範囲が狭く、打撃と共にしか当てることができないが、威力は高めである。十発ほどグリーンボールを当てて、やっとアクアゼルは消滅した。

今のワシのレベルでは、こんなに時間がかかってしまうのか……

しばらくすると、体中に力がみなぎってくるのを感じる。

消滅した魔物はマナに還元され、その一部が倒した者に吸収される。それがある程度蓄積されるとレベルが上昇するのだ。

力の上昇を感じつつ、消耗した魔力を回復させるため、ワシは手ごろな岩に腰を下ろすのだった。

2

ゼフ=アインシュタイン
レベル 5

魔導レベル

緋:2

蒼:2

翠:5

空:4

魄:0

街の周辺のアクアゼル狩りを続けて十日ほど、それなりにレベルも上がってきた。

魄の魔導を全く鍛えていないのは、この魔導を行使するにはジェムストーンという特殊な媒体が必要だからだ。

ジェムストーンはそこそこ高価なため、子供のワシには手に入れることができないのである。

「ま、今は他の魔導を使っていればいい」

ナナミの街周辺にあらわれるのは、魔物の中では最弱クラスに属するアクアゼルのみ。

経験値効率はあまりよくないが、今は倒せる魔物も少ないし、しばらくはこいつで我慢するしかない。

「というワケだ、相手になつてもらうぞ……！」

あらわれたアクアゼルに木の棒での殴打を仕掛け、同時にグリーンボールを念じる。

三度、グリーンボールを撃ち込まれ、ぐしゃりと崩れたアクアゼルはゆっくり消滅してしまった。最初は十発くらいかかっていたが……うむ、着実に強くなっているな。

息を整えていると、足元にニユルリとした感触。

ちっ、新手のアクアゼルか！

もがき振りほどこうとするが、子供の力では上手くいかない。

ワシは足を引っ張られ、逆さまになったままアクアゼルの頭上に持ち上げられた。

がばりとアクアゼルの身体が二つに割れ、ワシを食らうかのように挟み込もうとする。

「させるかよ……っ！」

吊り下げられたワシはアクアゼルの身体に手をかざし、魔力を集中させていく。

――緋系統中等魔導、レッドクラッシュ。

魔導の発動と同時に掌から生まれた爆炎が、アクアゼルを一撃で消し飛ばす。

背中から地面に落ちたワシ。そこには運悪く泥水があり、服が汚れてしまった。

「やれやれ、母さんに怒られてしまうではないか」

レッドクラッシュは爆炎で目の前の敵を焼き払う魔導で、念唱時間の割に威力も高く、近距離用の魔導では一番使いやすい。

現状のグリーンボールを使った戦い方では、かなり時間がかかってしまう。

そのため、一体目の戦闘中に二体目の魔物があらわれた時など、やむを得ぬ場合にはレッドクラッシュを使って一気に片をつけることにしているのだ。

だが、魔力を全て使い果たしてしまったな。

ワシはだらりと脱力し、意識を集中させていく。

――瞑想。

魔力を体内に循環させるイメージをして体内の魔力線を活性化させ、普段より数倍の速度で魔力を回復させる技術である。

術者によってその性能は大きく異なり、普通は座って行う。しかし、ワシほどになると立ったまま、歩きながら、果ては戦闘中においてもそれを行うことができるのだ。

……ま、大人しく座って瞑想した方が回復は速いのだがな。

瞑想により魔力を回復させてはアクアゼルを倒す。

それを何度か繰り返し、本日七体目のアクアゼルを撃破した。

「おっ」

アクアゼルを倒した後に、青い宝石を見つけた。

「ジェムストーンの破片だな……純度が低いので宝石屋に安く売れる程度だが」

魔物を倒すと、アイテムをドロップすることがあり、このような宝石だけでなく、例えば剣や盾といった武器防具など、その種類は多岐にわたる。

力尽きた戦士や魔導師の武具を透過したマナと他の物質を透過したマナが混ざり合って魔物化し、その魔物が倒されたときに、マナがアイテムとして再構成されると言われているが、詳しいことはわかっていない。

ちなみに冒険者たちはこういったドロップアイテムを売り買いし、日々の生活を送っているのである。

ジェムストーンの破片をポケットにしまっていると、暗くなってきたことに気づく。夕方という時間に加え、雲が出てきたせいであっという間に暗く感じる。

「つと、そろそろ帰るとするか。あまり遅くなると、母さんに怒られてしまうしな」

街へ帰るべく歩いていると、はるか先に多くの馬車が隊列を組んでいるのが見えた。

行商隊だろうか。何かレアなアイテムを売りに来たのかもしれないな。

ま、今のワシには関係ないし、とりあえず家に帰らなければな。

そう思っただけで歩いていると、馬車の一つから火の手が上がっているのが見えた。

遠目からでよくわからないが、武器を持った男が馬車を襲っているようだ。

先刻まで、他に人などはいなかった……ということばかり——

「雇った傭兵の裏切りか」

もしくは、盗賊が傭兵に扮していたか。

やれやれ、謝礼をケチって身元のわからぬ怪しい傭兵を雇っていたのだな。

しかしこの状況、行商隊の人たちには不幸だが、ワシにとっては幸いともいえる。

ここで彼らを助ければ、謝礼として高価なアイテムを貰えるかもしれないからな。

とはいえ、盗賊の強さ次第だ。

魔導が使えるとはいえ、今のワシはまだまだレベルが低い。

どうしたものかと思案していると、少女を乗せた馬がワシのいる方に向かって駆けてきた。

あの戦闘から逃げてきたらしく、少女は血相を変えてワシの前に立ち塞がる。

「キミっ！ 早く逃げなさい！ 私は街へ知らせしてくるから、どこか奴らの目の届かない場所

へ……」

そこまで喋ったところで、少女の胸から一本の矢が突き出てくる。

血塗れの矢じりに目線を落とした少女は、直後に口から血をぐりと吐き出した。

ゆつくりと、スローモーションのように馬から転げ落ちた少女はワシの方に手を伸ばし、ワシの

背後を指さす。